

「合気道」の近代：その戦前から戦後への断絶と継承 ・武術・武芸・武道の周辺を巡って

昭和五十年入学 稻賀 繁美

0. 藝術／武術・武藝／武道

文化・藝術を論じるべき主題のなかに、武術だの武藝だのが紛れこんだのを訝しく思われる読者もあることだろう。だが翻って考えると、今日の日本語でいわれる藝術という言葉は、明治初年に、美術工業の行政に関与したドイツ系のお雇い外国人が伝えた概念が、紆余曲折を経たのち定着したものであることが定説となりつつある（北澤 1989）。さらに翻って西欧の状況を見ても、今日いうような藝術概念は、単純

に言えば『判断力批判』のカントによって集大成されつつ認識論的な断絶を被って十九世紀初頭以降に市民権を確立した、たかだか二世紀の歴史を背負った概念に過ぎず（小田部 2000）、またその終焉を云々する議論も近年囂しい（Belting 1991）。それにくらべれば、習得可能な技芸一般をさすラテン語の *ars* は、語源的にはギリシア語の *techné* と同根で、東洋においても類似概念が長らく存在している。むしろ西欧近代の美術概念 *beaux-arts/fine arts/Schöne Künste*こそが、優れて西欧社会における近代 *modernité* の定義そのものと表裏一体な、地理的にも局地的にして、歴史的にも特殊な背景を背負った概念であった、とする見方も、けっして極論ではない。

以上の前提にたつてみれば、武術 *martial arts* が狭義の近代的な藝術 *fine arts* からは排除された、という歴史的事実そのものを究明することが、近代なる規定が かなるものだったのかを再認識するために、有効だということが判明しよう。東洋でも、例えば江戸末期に知られる『天狗藝術論』などに言う『藝術』とは剣術の技能を指す。西洋語でも類似の概念は *ars* を含んでいて、それが技藝の一領域として、その他さまざまな *ars* と同列に認知されていたことを示唆している。こうした近代以前の技藝観を再確認することは、近代と呼ばれる時代がそこにかなる認識論的断絶を持ち込んだのか、そしてそれがいかに今日なお我々の常識的な社会的判断を支配し続けているか：を明らかに出すためにも、不可欠な作業となる。

すでに明らかなように、藝術を論ずる場の連続性と非連続性を問題

とする設問にあって、武術 martial art/arts martialux/Kriegskünste を取りあげるとは、藝術という枠組みの設定そのものに含まれる連続性と非連続性とを問い直す契機を含んでいる。そのことを確認したうえで、こうした西欧近代の藝術観が、日本の近代にいかなる作用を及ぼしたのかを、武道一般ではなく、今日「合気道」と呼ばれる武術に焦点を絞って、説明してみたい。ちなみに、その開祖とされる植芝盛平が京都綾部に植芝塾を開いたのが一九二〇年、戦中期に躍進を遂げ、戦後には合気道として広く社会に認知されるなか、開祖・盛平は一九六九年に死去している。「日本の文学・文化の連続性と非連続性 1920-1970」という、本共同研究の設定にちょうど当てはまる文化事業として、合気道を考察の対象に取り上げる所以である。

1. 「武術」から「武道」へ

今日一般に「合気道」として知られている武道／武術は、植芝盛平 (Ueshiba Morihei, 1883-1969) という名前と結び付いている。一九七七 (昭和五二) 年には財団法人・愛気会が発足し、そこには「本会以外に日本国文部省によって許可された合気道に関する公益法人は存在しない」との規定が見える。名称としての「合気道」の正統性が、ここにひろく社会的にも認知されていることが分かる。合気会では盛平に「開祖」の称号を授け、守平の三男植芝吉祥丸 (Ueshiba Kishōmaru, 1921-1999) が二代目の「道主」を継承したが、その死去にともない、吉祥丸の次男、植芝守央 (Ueshiba Moriteru, 1951-) が三代目道主と

なって、現在に至る。ここに、家族の血縁によって道統を継ぐという原則が確立した様子がみられる。家元制度による世代交替を踏襲しているかぎりでは、ここには日本における芸道の伝承形態を基本的に継承した姿が見える。

だが「合気道」における家元制度の確立は、必ずしも伝統墨守を意味しない。むしろ家元によって伝統を継承するという姿は、武の世界にあつては、元来の「武術」から「お稽古事」への変質を物語っているのではなからうか。さらにそれらを「武術」ではなく「武道」と呼ぶ、明治末年以降に顕著な姿勢には、「道」という、中世以来の求道意識に訴えることによって、宗家による道統の統御を権威づけ、促進しようとする、「近代」特有の側面も認められようか。

このあたりの事情は、柔道や剣道さらには弓道、空手道といった、隣接する領域における近代体験と綿密に比較することが必要だ。図式的に復習しておけば、明治までの柔術は、嘉納治五郎 (1860-1938) による講道館 (1882) の設立によって、「柔道」へと様変わりしている。近代「柔道」は、西欧起源のスポーツとは、精神性の強調といった点で差異を主張しながらも、同時にスポーツとしての社会的地位をも徐々に獲得し、やがてオリンピック東京大会 (1964) で競技種目として認知されたことにも見られるとおり、戦後には国際的にも権威を握っていった。だが国際柔道連盟が嘉納宗家、日本柔道連盟と意見を異にするに及び、国際的認知と、家元としての権威の一元性の維持とが必ずしも両立しないことも明白となってきた。

劍術の場合、木刀や袋竹刀を用いた型稽古から竹刀を用いた試合形式への移行には、幕末の千葉周作の道場の影響力が指摘される。武徳会の成立（1895）の後、ようやく一九一九年になって、「武術」が「武道」に改められ、それに伴って「劍術」も「剣道」へと脱皮する。西欧近代に模範を仰いだ極東の立憲君主国は、西欧化の過程にあつて、「術」を「道」へと読み替える選択を取った。ここで近代化とは、一面では、技能（Ⅱ藝）とは一線を画した別種の精神的営みとしての藝術（Ⅱ道）、という觀念の成立によって定義づけられる。日本における「武藝」あるいは「武術」から「武道」への脱皮もまた、どこまで意識的なものであったかの検証はなお必要とはいえ、西欧近代の藝術觀の変遷に平行した範疇觀念の乗り換えだったことは、指摘するに値しよう。（例えば西歐語の語源としては *marital arts* に近似した、*Fine Arts* には、「美術」の訳語が定着し、「美藝」、「美道」といった用語は選択されなかった。岡倉天心の提案した「巧藝」：西欧でいう美術と工芸を含む包括概念：も、結局定着していないが、それを補完するかたちで、柳宗悦提唱の「民藝」が成立した。華道、書道なども含め、担い手の獨創性よりも求道性、伝統の継承性に力点を置く分野で、「道」の文字が好まれる傾向を一般に確認できよう。）

ここで面白いのは、まず、その後の大衆小説の英雄、姿三四郎の原型を提供した西郷四郎（1868 生まれ）の存在だ。講道館と結び付けて語られることの多いこの人物は、実はこの先合氣道として知られる武術の流れを汲む人脈のなかでも、特異な存在として浮上してくる（実

際には、「山嵐」とは、当時の柔術家が軽視していた足技の改良とみられる）。とともに、講道館の世間的成功に大きく貢献した、空氣投げの三船久蔵（Mifune Kyūzō, 1883-1965）が、正確に植芝守平の同時代人であつた、という符合も無視できない。明治以降の近代化・西欧化の風潮のなかで、変質を免れず、場合によっては消滅してゆきかねない技藝への郷愁。あるいは、それにたいするいささか神秘的といつてよいまでの思い入れに由来する、名人待望論。あたかもそうした時代の期待に答えるようにして登場し、それにふさわしい世間的評価を、結果的に得ることになる代表格。その双璧といふべき三船と植芝とが、ともに明治維新から十五年ほどを経過した時期に生を受けていたことは、けつして偶然の一致として済まされることではあるまい。逆にいえば不世出の武藝の達人：とその伝説：の誕生は、それ自体、近代の符丁として読み解かれるべき社会現象だったことになる。

2. 源流

いうまでもなく、合氣道も、植芝盛平ひとりが零から築き上げた武術・武道ではない。ここで技能の伝承が当然の問題となる。ひろく認知された事実として、いわゆる、大東流「合氣柔術」に触れる必要がある。その中興の祖として、武田惣角（Takeda Sōkaku 1859-1943）の名が触れられる。世代としては嘉納治五郎とほぼ同年輩、世間的な知名度からいえば嘉納の比ではないが、明治以降の武術の伝説的な名人として、惣角の名は、合氣道界の現状に飽き足らぬ人々も含め、近

年急速に再評価を受けている。惣角の知名度が比較的に低かった理由もまた、武術、武道の近代と無縁ではない。嘉納治五郎は、明治日本に必要な、心身ともに健全で円満な社会的責任感ある知識人を育成する方策として、いわば明治国民国家の要請の一環を担うべきものとして「柔道」を唱えた。これとは対照的に、武田惣角はそうした明治国家の官吏養成の必要とはほとんど無縁なところで、自らが修得し体現した秘伝の武術を、門外不出の原則のもと、相応の報酬を払う、ごく少数の弟子へと直接伝授することに徹している。

開明派の能吏たる頭でっかちの嘉納治五郎にたいして、武田惣角は、あくまで会津若松藩士、福島事件では実践の生死のやり取りを体験した、武士の最後の生き残りたる武術家としての一生をまっとうした。

惣角は、小野派一刀流を学び、榊原健[健]士(1830-1894)や桃井春蔵(1826-1886)の道場で修行し、さらには長年にわたる武者修行を体験したとも言い伝えられる。だが、真偽のほどは疑わしく、またその武術技法の系統に関しては、確たる証拠はあがっていない。父、惣吉から大東流の稽古を受けていたものと、一般に想定されているが、大柄で職業力士だった父ではなく、祖父の惣右衛門(1863年死去)経由での伝承を想定する説もある。それと同時に、嘉納治五郎の初期の弟子でもあり、また西郷四郎をのちに養子とした保科近恵¹¹西郷頼母(1830-1903)から手ほどきを受けた、との推定もあるが、家老にして神職たる保科に武術の心得があった証拠はあがっていない。惣角の巡業助手を務めた佐川幸義は、惣角から榊原健吉の弟子だったなどと

いう話は聞いておらず、保科に武術の心得があったとは思えない、と証言している(木村 一九九五:109-116)。むしろ文盲だった惣角が、受講者に講習で授けた巻物をまとめたのが頼母ではなかったか。とまれ、一八九八年以降、惣角は、自分の武藝を教授した英名録と謝礼録を、死去に至る四十五年間残しており、その活動の詳細が知られる。

その英名録、謝礼録を見ると、植芝盛平は、北海道遠軽の久保旅館で、一九一五年に、当時五十四歳の武田惣角より十日の稽古を受けている。その後両者には密接な関係のあったことが知られるが、盛平は一九一九年一二月、紀州田辺より父危篤の報を得て、北海道白滝郷を去り、二度と戻らない。出立の際、家屋を惣角に譲ったことが知られている。帰宅の途中の出来事が発端で、植芝は大本教の出口王仁三郎に帰依し、京都にほど近い綾部に家族ぐるみ移住して、大東流を教授し始める。一九二二年四月には惣角が綾部に現れ、植芝塾で教授しながら五カ月を過ごす。この時盛平は惣角より教授代理を認許(九月十五日)。だが王仁三郎は惣角のことを「なんや血腥い」といって好まず、盛平は両者のあいだで板挟みとなった様子が見える。こうしたゆえか、「合気」なる名称の発端に関しても、武田家側と植芝家側の解釈は折り合わない。植芝側は、「合気」なる名称は出口王仁三郎師より授けられた、との立場を取る。だが武田側は、同一の語彙はすでに大東流のうちに伝承されていた、と主張しており、両者の見解は対立している。植芝と大東流の関係や相伝の経緯をもっとも詳細に研究しているのは、スタンリー・ブラニンだが、彼も言うとおり(ブラニン 1992:38)、

盛平が惣角の才能や実力に畏敬する一方、惣角が盛平を最も才能ある弟子の一人として高遇したことも否定できない。一方で今日の合気道が大東流なくして生まれ得なかったことは、技法的に明らかである。

また他方大東流も、「合気道」の世間的な認知および普及あつてこそ、その源流として、改めて世間から再認識され、自らの存在を主張する権利と義務とを自認するに至ったもの、と見てよからう。

大東流は、その後、家督を相続した三男の武田時宗 (Takeda Tokimune, 1916-1993) に引き継がれる。大東館館長 (1953) を唱えた時宗が、網走において、その死去直前まで大東合気武道の宗家として道統を継ぐ。さらに惣角から一九一五年に教授代理を拝命した吉田幸太郎 (Yoshida Kōtarō, 1883-1966)、同じく一九一七年に教授代理を拝命の堀川幸道 (Horikawa Kōdō, 1897-1980) による大東流幸道会 (1950)、また一九三二年に専受代理を許された佐川幸義 (Sagawa Yukiyoshi, 1902-98) などがあり、あわせて、大東流合気武術の系譜を形作る。ここには、今日の合気道では簡略化されてしまった伝来の多種多様な技法、関節技などを、古武術として伝承しようとする傾向、あるいは合気道が、相伝ではない集団指導による同好者の粗製乱造のため、その世間的栄達とは裏腹に、術理を形骸化してしまった欠点を見据えつつ、昔ながらの少数精鋭直接指導により、武術本来の技法追求と伝達とを目指す志向などが見て取れる。

3. 「合気武道」の成立

惣角より教授代理の免許を受けた盛平が「合気武術」の名称を唱えたのは一九二二 (大正十一) 年 (ただし「合気」の用語は、惣角の教えにあつたもの)。その直前には、不敬罪により、大本教団に当局による弾圧が加えられた、いわゆる第一次大本教事件 (1921) が発生している。出口王仁三郎師保釈出獄 (1922.6.17) に続く、大本内部の改革にあつて、盛平は「植芝塾」武術教授に加え、「農園世話係」に就任、また大本消防団の隊長となつて、綾部における大本の評判を高めるのに一役買ったといわれている。つづく一九二三 (大正十三) 年に、王仁三郎は「世界宗教」「世界経倫」を旗頭に、秘密裏に渡満入蒙を執行するが、その一行のなかには盛平の姿もあつた。大陸浪人や特務機関の斡旋を得た一行は、「西北自治軍総司令官」の肩書を張作霖より得ていた蘆占魁と語らつて蒙古潜入、自治国樹立を画策したが、蘆が「内外蒙古独立軍」の旗揚げをするや、これに疑心暗鬼を起した張の手配により、王仁三郎一行は襲撃に晒され、六月二〇日、パインタラで奉天軍により包囲され、蘆の一味は全員虐殺、日本人関係者は銃殺寸前ところで、危うく日本領事館の介入により救出され、内地へと強制送還される。約半年にわたる、この死線を越える体験のさなか、盛平は銃の弾丸が飛んでくるより一瞬早く、白い光のつぶてが飛んでくるのが見える、といった超常経験を積み、実際に何度となく銃弾を躲し、そのなかで異常ともいえる直感力を養っていったらしい。帰国後もポルターガイストに似た怪異現象を頻繁に体験し、一九二五年の春には、舞鶴から訪れた海軍将校の剣道教士との手合わせのあと、道場外の井戸端で金

縛りのような状態となり、天空から降り注ぐ光に打たれるや、自らのからだに黄金の光と化す体験をした、という。盛平の思考がいわゆる神懸かりの傾向を強めてゆくのは、この頃からだろうが、それはまた武田惣角の境地にもはや囚われない、独自の心境への覚醒あるいは覚悟を語る逸話ともいえるだろう。だがこのいささか神秘的な解釈や、超人的な武勇伝が、やがてその後の合気道から、技法としての術理の掘り下げを回避させる便法となつていった面もまた、否定できないだろう。実際、いささか人間離れするまでに研ぎ澄まされた知覚能力は、それだけでは、対峙する相手を手玉に取るような、体術における圧倒的な卓越を、そのまま説明するものではないからだ。

武術の伝承に限らず、お稽古事には、守・破・離という契機を避けては通れない。盛平が惣角から教授代理を授かった頃と推定されるが、惣角が綾部を訪ねた際に、盛平が居留守を使って惣角を激怒させたとの逸話が伝わっている。盛平は自ら「合気武術」を唱えた前後から、王仁三郎への配慮もあつてか、惣角から距離をとろうとした気配がある。両者の桎梏あるいは行き違いの証拠として、頻繁に言及されるのは、一九三六年六月、盛平が指導していた大阪朝日新聞の道場を、突如(㉔)惣角が訪ねた一件だろう。当時道場長だった久球磨 (Hisa Kuma, 1895-1979) より、惣角来訪の報を受けた盛平は、惣角に会うこともなく大阪を退去し、これより三年にわたって、惣角が道場の指導にあたることになった、という。久はすでに盛平から三年にわたって指導を受けていたが、惣角は予告もなく突然道場に現れたと主張している。

もっともその前年に、朝日新聞は北海道の惣角に取材をしており、武田家側では惣角が大阪朝日新聞社から招かれていたものの、との見解を取る。あるいは久自らが惣角を招いたものの、案に相違して盛平とのあいだの軋轢を表面化させる結果となつたために、事態を潤色した、といった状況も推定できようか。いずれにせよ久は、惣角より一九三九年三月には免許皆伝を許されることとなる。

傑出した師弟同士には、なかば不可避な事態とはいえ、惣角と盛平との、こうした軋轢の背景には、何が想定できようか。教授代理となつてのちの盛平は、竹田惣角の名を記した大東流目録を弟子に授与しているが、一九三〇年代なかばまでに、その数は数百名に及んだと推定される。一方教授代理を認可した英名録には、新弟子ひとりあたり入門料三円を惣角に払うとの規定がある。その運用にもともと惣角は鷹揚だったらしいが、自らも老境を迎え、また植芝に海軍はじめ膨大な弟子が集まり始めれば、事情はおのずと異なってきただろう。惣角とくらべれば、はるかに「近代的」な価値観をもち、弟子養成に関して世故に長けた盛平の隆盛を認識した晩年の惣角が、自分の糊口への配慮もあつて、盛平にすべての秘訣を伝授したわけではない、などの主張を(大阪朝日新聞での教授などの際に)周囲に流した、といった事情もあつたやも知れぬ。盛平にしても、名目上はパテント料を惣角に払うべき手前ながら、時流に乗り、案に相違して果たせぬ事態となり、惣角の来訪や催促に、内心頭を悩ませていたやも知れぬ。とすれば、この支払い規定が、両者の確執の一因となつたとも推定できる。

また伝承すべき武術の正統性に関しても、一九三〇年代までに、両者には微妙な対立関係が生まれていた。植芝側が主張するように、名目上は大東流教授代理だが、惣角が朝日新聞道場で公言したと伝えられるように、実質的にはなお相伝されなかった幾多の技法があった可能性も否定できない。これらの流派に今日伝承されている技法を見る限り、今日の合気道が大東流に由来していることは明確なものの、ある時点から両者が枝分かれして発展していったこともまた、否定できない。あるいは惣角が盛平に教授した技法は、三十代初期の盛平という、年齢的にも若く、希有の体力・腕力の持ち主と、惣角同様、比較的小柄なその資質に合致した技の伝授に力点を置いていた気配もある。とともに、盛平が「合気武道」を唱えて以降、惣角の技を意図的に取捨選択して継承・発展させた可能性も否定できない。戦前にはなお大東流の影響が色濃かった技も、その後盛平の加齢とともに変質していった。

4. 戦前期合気武道の発展

さて、戦前期の合気武道の社会的な発展にとって、戦前の社会、とりわけ軍部との係わりは無視できない。盛平は一九二五年（大正一四年）秋、竹下勇海軍大将の招請により上京。山本権兵衛伯爵（元総理）ら貴顕名士をまえに演武を披露、翌年につけて、合気武術を指導。一九二七（昭和二）年には、出口王仁三郎の勧めもあって、大本を離れ、一家をあげて綾部を去り、上京。翌年から一九三七（昭和十二）年まで海軍大学の武道講師として招聘され、合気武術を教授。厳しい入門

条件にもかかわらず入門志願者は多く、一九三〇（昭和五）年には、牛込若松町の旧小笠原家下屋敷跡にて新道場建設に着手。この年の十月には嘉納治五郎が来訪し、すでに一家をなした盛平を講道館に招くのは無理との判断から、門下の武田二郎、望月稔を研修のため長期派遣。道場破りに訪れた三浦真陸軍少将がその場で心服して入門、その依頼により盛平は陸軍戸山学校の武道指導を担当。三一年に落成した八十畳の道場は皇武館と命名され、「牛込の地獄道場」の異名を取った。この時期、内弟子だけでも二十名以上を数えるに至る。

こうした軍関係者との交流とともに、時局との係わりもまた、看過できない。一九三二（昭和七）年には、出口王仁三郎の懇請をうけ、盛平は大日本武道宣揚会会長に就任（王仁三郎は総裁）、翌年兵庫県朝来郡竹田町に道場を開設し、「武農一如」の自給自足を実践。実際には、皇武館の分館のような体裁となつて、大本関係者とのあいだに摩擦もあったようだ。三五年には宣揚会の関係で、門弟の井上与一郎、村重有利ほかを、朝鮮、満州、中国へ派遣。宣揚会の趣旨には、破壊殺傷ではない破邪顕正を謳い、皇道を世界に実行する昭和維新実現のうえで、大日本武道を宣揚するものとある。すでに前年の一九三一年九月一八日には柳条溝での鉄道爆破事件をきっかけに「満洲事変」が勃発し、「日帝による中国侵略」が本格化していた。軍部に先駆けて宣統帝・溥儀擁立による独立国家構想を暖めていた王仁三郎は、満州国の将来にも目配せし、さまざまの深慮遠謀を込めて大日本武道宣揚会を旗揚げしたものとおぼしい。

だが一九三五（昭和十）年一二月には、第二次大本事件が発生し、綾部、亀岡における神苑は一カ月にわたりダイナマイトで爆破されるなど、大本教には徹底的な大弾圧が加えられることになる。当時王仁三郎は陸軍右翼の皇道派と結託し、氣脈を通じて武力革命を画策する危険人物としてマークされており、不敬罪容疑で教団関係者幹部はねこそぎ検挙・拘禁され、のべ数千人が取り調べを受けている。逮捕者のなかには自殺者、獄死者も出ている。当然植芝盛平にも捜査が及ぶのは必至の情勢だったが、結果的には一兩日の事情聴取で事なきを得、墨が及ぶことはない。この極めて例外的な扱いの背後には、華族や軍部を含む各界各層への武道振興の貢献が認められていた、といった事情も推測されているが、より具体的には、富田健治・大阪府県警本部長、森田儀一・曾根崎警察署署長が、大阪支部道場において入門していた、という人間関係を指摘できよう。植芝吉祥丸は、そうした警察関係の人脈が、強引な捜査命令に対する盾となりえた可能性を示唆している（植芝吉祥丸 1999:223）。

こうして大本事件の危機を乗り越えるのといわば裏腹に、時局柄ゆえの社会的要請も煩繁となる。盛平は一九三九（昭和十四）年には武道大会に招かれ渡満。満洲国武道会常任理事の和久田三郎（というより、相撲協会を脱退した力士の天龍といったほうが有名だろう）が、中央銀行道場での公開演武会で、周囲より請われて手合わせしてみたものの、見事に手玉に取られて感服し、その場で弟子入りを申し出た、という逸話が知られる。翌四〇年にも、奉祝二千六百年記念行事の一

環としての武道演武会に招聘。一九四二（昭和十七）年には、満洲国建国十周年記念式典のため、三度招かれ、新京の神武殿大道場に立っている。そのかん満洲国武道会顧問、神武館顧問、建国大学武道顧問などの役職も歴任し、満洲国軍官民関係者との交友も密接となった。最古参の内弟子のひとり、富木謙治は、建国大学教授として赴任し、終戦までその職にあつて合気道を教授している。日本側の軍あるいは特務機関を手始めに、満洲・中国側にまで広がる師弟関係もあつてか、一九四一年には近衛文麿らの意をうけて、蒋介石ら民国政府関係者との和平工作模索のため、秘密裏に出国し、南支軍小司令官・畑俊六大将と連絡を取るなど、「国事に奔走」。モンゴルの徳王、朝鮮の李王などの王族の信頼と好意をも勝ち得ていた盛平は、大日本帝国の大陸経営、とりわけ満洲国との関係で、合気武道の社会的認知を広げていったことになる。

5. 戦前と戦後のあわい

「財団法人皇武会」から「財団法人合気会」へ：

その一方、一九三九（昭和十四）年ころから、財団法人としての組織固めが、軍・政・官・財界上層部の門弟あるいは後援者を中心として推進されている。一九四〇（昭和十五）年四月三十日には「財団法人皇武会」が厚生省より認可される。初代会長には竹下勇海軍大将、副会長には林桂陸軍中将、役員には近衛文麿公爵、前田利為侯爵ほかの名前が連ねられている。この法人認可は、一方では戦前の軍部、華族と

×

の密接な関係によつてはじめて実現したものと見え、顯著に戦前的な性格を見せている。また合気武道は憲兵学校の憲兵体術として採用されている。さらにこの時期、工業倶楽部、交詢社ほか、住友、有恒倶楽部など政財界人との交流も深めてゆく。こうした軍部や財閥との関係は、敗戦により軍隊組織が消滅し、財閥が解体されることで、戦後にはいやおうなく一旦は断絶する。だが同時に、こうした戦前期の法人認可によつて、戦後の発展あるいは再生への足掛かりを得ていた、という点では、ここに法人組織としての合気道の、戦前・戦後にわたる、したたか~~な~~にも一貫した連続性を認めることもできるだろう。

今日ではひろく社会的に定着した「合気道」の名称だが、これに関しても、戦中期の社会事情が反映している。すなわち一九四二（昭和十七）年には、戦時下における各種団体統制の一環として、合気武道も武徳会と関係をもち、平井稔（Hirai Minoru, 1900-1998）道場総務が財団法人・皇武会からの派遣というかたちで、武徳会・合気道部の運営にあたっている。こうして武徳会との関係もあつて、この時期に「合気道」が公式名称として確立された。いわば時局下の便法ともいふべきこの名称が、戦後の平和と民主主義を謳う社会において、いちちやく財団法人として再認可される際の名称に採用されて、延命する。すなわち敗戦後の一九四八（昭和二三）年、二月九日「財団法人合気会」が、他の武道関係諸団体に先駆け、文部省により認可される。

合気会認可申請書に見える文言には、戦後の価値観との調和のなかに自らの理想を見いだそうとする姿勢が明確に示される。「そもそも合

気道とは、大自然界の生物相互愛の雰囲氣に法つたものであり、「中道の理にも適い、天地に融合する心身の保健、加害に対する護身の技術」と定義される。それは「一種の舞樂道と健康道とを兼ね備えた遊戲ともなり、体育でもあり、人格涵養の至術でもあり、生命の金殿玉楼を造るものであり」、「男女の協営にも適し」、「無心にして自然の妙に入り、無為にして変化の神を窮む」ものだという。とりわけ「合気とは愛氣と語音も同じく、其の意もまた合い通ずるのであります」との、「人間相互愛」の強調は、軍国主義への反動と、武術一般への嫌悪が濃厚だった戦後社会にあつて、その後の合気道の理念的機軸を形作つてゆく。曰く「武産合氣」、曰く「平和の武道」。曰く「動く禅」。

6. 道統と拡散

だが戦後の合気道の発展をみると、それがとても財団法人合気会一本によつては束ねられない多様性を孕み始めていたことも見落とせない。まず、戦前の合気武道時代からの有力な弟子筋は、その多くが戦後独立した活動を展開してゆく。まず学生相撲チャピオンだった久球磨は、最初盛平に師事しながら、惣角から、教授代理さらには大東流免許皆伝の資格を得たが、戦後には球磨会を結成。戦前期からの内弟子だった平井稔は戦後大日本光輪洞を創設し、その道主となる。植芝盛平の甥にあたり、戦前からの内弟子のひとり、井上与一郎・方軒（また鑑昭 1902-1994）は、戦後、親英体道を唱えてこれを主宰。最初講道館に入り、嘉納治五郎の命により盛平に入門した望月稔（Mochizuki

Minoru, 1907-2003) は、静岡の養精館道場を運営。また早稲田大学柔道部出身で、大正十五年に入門した富木謙治 (Tomiki Kenji, 1900-1979) は、満州国で最初大同学院、ついで建国大学に移り、合気道を担当したが、戦後復員ののち、母校の柔道部師範、一九五八年からは合気道部初代部長となり、日本合気道協会を唱え、試合形式を導入し合気道の競技化を目指した。これらはいずれも財団法人合気会および植芝宗家とは別途の道を歩んでおり、なかには合気道を称しない人々も見られる。

さらに戦前から内弟子あるいはそれ同様の扱いを受けていた人々にも、独立してゆく傾向が顕著となる。一九三二年に中学五年生で入門し、満州にも盛平に従った塩田剛三 (Shiota Gôzô 1915-1994) は、復員後、埼玉県岩間の盛平のもとで稽古を積むが、一九五一年には日本鋼管の嘱託となって合気道の指導にあたり、また警視庁管内の警察官に荒稽古をつけて武名を高め、一九五四年に、戦後はじめて開催された日本総合武道大会での演武が大好評を博する。そうした実績や指導者としての資質を買われて、一九五五年には合気道養神館を設立。分派活動と見なされることもあったが、塩田による養神館が、実業界および警察関係を中心として、戦後の合気道の興隆にとって大きな貢献をなしたことは否定できない。

また、一九六九年の盛平の死後、「道主」が二代目の吉祥丸 (1921-1999) に代わった時点で、ほぼ同世代の有力な人々が、何人か合気会を去っている。例えば塩田の出征後の一九四一年に入門した

藤平光一 (Tôhei Kôichi 1920-) は、盛平の信頼を得、その抜群の技能も買われて、戦後合気会本部道場の師範部長を務め、ハワイを始めとする海外支部の発展にも寄与したが、盛平の死後、合気会を離れ、「氣の研究会」を主宰した。これとは別に、熱心な大本教信者の家庭に育った砂泊誠秀 (Sunadomari Kanshû 1923-) は、その父が綾部時代に盛平に入門しており、自身も一九四二年頃から盛平の内弟子となつたが、これまた盛平死去にともない本部道場を離れ、熊本で合気道万生館道場を主宰している。また養神館との関係も濃い田中茂穂 (Tanaka Shigeho, 1928-) は、明治神宮至誠館名誉館長という立場から、合気会には直接属さず、植芝宗家に対して礼を取る。

このように、合気道を事とする人々がすべて財団法人合気会に所属するわけではないが、そのなかで合気会が最大の組織であることは動かない。これに属する戦前からの弟子では、大沢喜三郎 (Ôsawa Kinsaburô 1910-1994)、白田林二郎 (Shirata Rinsirô 1912-1993)、また建国大学出身の奥村繁信 (Okumura Shigenobu 1922-) のように生涯本部道場の運営に尽力した師範もある。また田中伊三郎・万川 (Tanaka Bansen 1912-1988) のように、一九三六年に稽古を始め、戦後合気会発足とともに、一九五二年以来、初代合気会大阪支部長を務めた人物もあり、同年には、引土道雄により合気道熊野道場も開かれていた。さらに斎藤守弘 (Saitô Morihito 1928-2002) は、敗戦直後より岩間で盛平に師事し、永年茨城支部長を務めた。

7. 戦後の展開とその要因

戦後、合気道が広く一般へと普及しえた要因としては、おおきくふたつの側面が指摘できよう。ひとつには演武会形式による、一般社会への公表と勧誘。いまひとつは同好会の発展。合気会としての戦後初めての一般公開の演武会は、一九五六年九月、東京日本橋高島屋百貨店屋上の特設会場での開催が嚆矢となる。戦前は、稽古場に入れるのは入門を許された塾生に限定されており、技の披露も、公式の武道大会における模範賛助演武に限定され、不特定一般の市民に公開するなどといった考えは、盛平にはなかった。ましてや武田惣角にあつては、術の伝授は巡業先で受講料を支払った講習者に限定されており、稽古を盗み見されることには、極端なまでの警戒があつた。秘伝の温存と限定された門人への相伝をもつぱらとした閉鎖的な武術習得は、合気柔術／合気武道が合気道へと看板を掛け替える過程で、技法の一般への公開と、広範な普及を旨とする社会事業へと変貌を遂げた。その背景に、戦前から戦後への価値観の転倒、戦さの時代から平和の時代への移行があつたことは、疑いない。

もうひとつの要素としては、一九五五年頃から、会社同好会とともに、東京大学を始めとして各大学に合気道部が設立されたことがあげられよう。東大赤門合気道部などを中心とする大学組織が名乗った全日本学生合気道連盟は、養神館系や早稲田大学とも人脈が深く、合気会とはあい容れず、ために合気会側では別に、関東と関西の両学生合気道連盟を結成するなど、その系列化の経緯には、この種の団体設立

にとかくありがちな混乱を伴った。だが、こうした大学における受け皿が、合気道の普及におおきな力を発揮したことは否定できない。

さらに戦後の合気道を語る際には、第三の要因として、海外への普及を見落とすことはできない。一九五一年に望月稔が欧州で指導したのを皮切りとして、植芝盛平自身も、紫綬褒章授与の翌年、一九六一年には、ハワイ合気道開館式列席のため、七十八歳の高齢ながら四〇日におよぶハワイ滞在の旅に出る。先に触れた藤平光一のほか、多田宏 (Tada Hiroshi, 1929-) は毎年のようにイタリアへ出稽古に向かい、田村信喜 (Tamura Nobuyoshi, 1933-) はフランスのボルドーに永住、山田嘉光 (Yamada Yoshimitsu, 1938-) はロス・アンゼルスを拠点にアメリカ合衆国各地で指導をしており、ドイツではデュッセルドルフ在住の浅井勝昭 (Asai Katsunaki, 1942-) が広範な弟子をドイツ各地に育てている。海外の発展に関しては、戦後第一号としてはフランス人アンドレ・ノケ (André Noguét 1914-1999) の入門に始まり、今日では欧米の主要都市には、場合によっては複数の道場があり、多くは各国の母国人によって運営されている。フランスのクリスチャン・ティシエ (Christian Tissier, 1951-) は高名な高段者も輩出している。ここにあげた若干の名前も、その多くは一九七〇年に既に活躍しており、一九八〇年代初頭までには評価の定まっていた高段者の、それも一部に過ぎない。国際合気道連盟の発足は一九七六年。だが、その後のここ三十年ほどの発展に関しては、共同研究の対象年限の範囲を逸脱するため、ここでは割愛する。

8. 合気道における戦前と戦後の連続と非連続

以上、合気道の形成・発展の概観を踏まえ、以下共同研究の主旨に照らした総括を試みたい。(一) 法人格としての社会的存在、(二) 武術という技法の伝承および(三) 家元と総称されるお稽古事組織の三点に分けて考察しよう。第一に、まず法人格として見ると、合気道は、戦前のいわゆる軍国主義の高まりのなかで、それと競合しつつも危険思想として弾圧された大本教と密接なつながりをもち、しかし大本事件から辛くも生き残ることでもって、戦前の政財界、とりわけ陸海軍や憲兵学校に浸透し、その方面の支援を得て財団法人の資格を獲得して、基礎を固めた。軍との密接な関係や、満洲国経営という、戦前の大日本帝国の国策への関与が、合気武道の社会的認知に役立ったが、戦後となると、いわばそうした戦前の滑走路から離陸して、戦後の価値観に合致した、平和の武道という意匠に身をくるみ、組織としても幾何級数的といつてよい発展を遂げた。表立った思想的変節や挫折を経験することなく、戦前から戦後への価値観の断絶や支持基盤の崩壊を乗り越えた。それを非連続のなかの連続と言おうか。

第二に武術としての連続性・非連続性はどうか。この点を検証するには、戦前・戦後という比較よりは、柔道あるいは大東流合気武術といった隣接する分野との比較のほうが有効だろう。試合を取り入れ、精神性は重視しながらも競技スポーツとしての性格を濃くして国際化を遂げた柔道に比べ、合気道は(富木流などを別とすれば)

競技を否定し、型稽古の伝統を守ってきた。そこには柔道が競技化のために捨てた危険な技、間接技などが残され、また剣術・棒術・槍術などとの連携も維持されている。しかし現今の柔道が腕力に頼りがちなとは違って、接触の瞬間に相手の姿勢を崩し、場合によっては相手にほとんど触れることもないまま投げ飛ばす、いわゆる「合気」に関しては、技法としての伝承再生産に成功したとは言い難い。一部の例外的な高段者を除けば、現在の「合気」は、術技としての継続性を失って形骸化し、一部からは、まったくの空虚な真似事、馴れ合いの八百長へと墮していている、との辛辣な批判を蒙ることも少なくない。

ほかならぬ「合気」の解釈に関しても、「後の先」といった崩しのタイミングの問題とする力学的な解釈、心身一如によって発する「気の流れ」といった、初心者や部外者には実体のつかみ難い説明、合気とは愛気なり、に代表されるような観念的あるいは宗教的な把握、あるいは佐川幸義のように「相手の攻撃を無力化する身体技術」とするきわめて明快だが、その体得はきわめて困難な技法観など、相いれない見方が乱立している。つまり、合気道の依って立つべき中心概念そのものの理解に、多様化が顕著であり、それは核心理念の空洞化の惧れとも無縁ではない。そしてこの混乱は、技法の習得・伝承方法の変質とも密接に係わっている。実際、高度の技法体得者との対人的なお手合わせによる接触体験なくしては「合気」なるものは容易に実感しがたく、また実感できたからといって、それで即・習得できるものではない。技法としての伝達方法が確立しがたい体術など、教授すること

そのものが著しく困難であり、その外面だけをなぞれば、いわゆる「呼吸投げ」あるいは「合気投げ」など、容易に形骸化してしまうのも当然だろう。大学の運動部レヴェルの指導や、町道場での集団稽古のような習得方法では、もとより術理の体得など望むべくもない。とすれば、合気道も、一般への普及を目指し始めた時点で、すでにその術理の連続性を犠牲にする選択を：かならずしもそうとは自覚せぬままに：下していたことになる。

こうして、同じ合気道を自称していても、その実践者の技法にどこまでの連続性があるのか、問題となる。植芝盛平個人を取ってみても、加齢に伴う変化を無視できない。戦前の内弟子などは、戦後の稽古は型だけの体操あるいは舞踊同然で、戦前の稽古の峻烈さ、真剣さとは別物になった、との評価を漏らす者も多い。弟子筋の技法や稽古方法を見ても、何歳頃の盛平に稽古をつけられたかで、あきらかな違いが見て取れる。また師匠が無意識で体得してしまった技法は、意識化されていないために、かえってその弟子の世代には伝達され難い、という陥穽がある。技法の勘所にかんしては、弟子からの指摘や質問が図星であればあるほど、かえって師匠が逆上したり、はぐらかす場合の多いことは、武田惣角に関する佐川幸義や、植芝盛平に関する塩田剛三の：とりわけ運足の秘訣に係わる：回顧談からも窺える。

9. 運動体組織としての連続性と非連続性

この問題は、第三の、家元としての合気道組織の問題に連なる。現

在の合気会合気道では、開祖盛平をひたすら天才あつかいして、その「神技」を別格に安置し、凡人は凡人たる境地に安んじる旨の諦念に自足しようとする傾向も見られる。たしかに若輩者は、単純な技術的優位や、時に神秘的なまでの強さに憧れる傾きが強い。そうした強弱や勝負への拘りは低次元であり、試合での勝敗への執着を脱したところに開けるのが合気道本来の境地だ、とする見解にも一理ある。とはいえそれは、ひとつまちがうと、盛平なら盛平が、卓越した術者として会得した晩年の境地：「万有を普遍愛で包み込む」などなど：を、自分の中途半端な生悟りと同一視して、己が不十分な技量を安易に自己合理化する口実ともなりかねない。馴れ合いの約束事でなければ掛からなような技が規格化され、なぜそれで正しいのか、という疑問を無視して教条的に教え込まれ、技法に関して煩瑣な指導や禁則がはびこるⅡⅡ。そうした由々しき事態は、とかく入門者が過多になつて乱暴な選別が不可避になつた場合、あるいは真に実力のある指導者が払底した場合に多く出来するものだが、これはおよそ稽古事一般に当てはまる通弊だろう。そして悪いことに、このふたつの傾向は、しばしば同時に発生しがちである。また、有名作家の作文教室から芥川賞作家が輩出しないのと一緒に、天才に習ったからといって、その弟子が皆天才となれる筋合いのものでもない。それが、お稽古事の宿命でもあれば、家元制度の組織維持には不可欠の、したたかなからくりでもある。

秘匿すべき武術から脱皮して一般への普及を使命とした合気道にとつても、その精神における連続性の主張：すなわち「開祖」の遺訓の

貫徹；が、具体的な身体技法の水準での、我知らぬ非連続性：すなわち技の形骸化：を招きかねない危険とも裏腹なことは、一般論の次元で確認しておく必要があるだろう。そして合気会以外の諸流派のなかに、宗家との断絶を主張することにより、宗家の家元としての必然的な変質とは非連続な関係を取りつつ、かえって技術の水準では、かつて目指されていた術理との連続性を模索するような志向が出てくるのも、全体の布置のうえでの均衡回復現象として理解することができるだろう。

さらに大きく、海外における日本文化受容の連続・非連続という面に一瞥して、本稿を閉じようと思う。戦前の国際文化振興会の時代から、日本の文化輸出には、無形文化財としては、いわゆる伝統藝能、有形文化財としては伝統工藝に、重点が置かれて久しい。それは受け手の側の需要をも見越しての奨励だったが、ともすれば外国での異国趣味に迎合した選択となる嫌いも否定できなかった。二十世紀に生まれた、「近代における伝統の創出」の一例であり、現代の伝統武道たる合気道もまた、そうしたエキゾティシズムと無縁ではなかっただろう。ところが今や、合気道は日本人の専売特許であるどころか、海外にも老若男女を問わず、百万単位の愛好者をもつ、国際的といつてよい藝事のひとつに発展を遂げた。同じ武藝に分類されつつも、競技による勝敗があり、三十歳を越えれば体力的にほぼ現役を退く運命にある諸格闘技とは違って、「合気道」は、意思さえあれば生涯にわたって嗜むことができ、加齢とともにかえって捌きにも深みが生まれ、年長者で

も経験を積みめば、血氣盛んな若者や壮年相手に十分に対処でき、技の探求にも限界がない。そうした利点をもつ「合気道」は、狭義の武術としての在り方からは半歩退却したかもしれないが、そのことでかえって大きな膨らみをもつ支持層を獲得し、愛好者による人種や国境を越えた親善と意思疎通の道具となりつつある。

合気道の国際的發展：そこに満洲国・建国大学以来の五族共和の理想との連続性を見るか、それとも戦後の日本国憲法の掲げる戦争放棄の理想の、最良の具体的実現の一例を見て、戦前の尚武の気風からの非連続を見るか、評価はさまざまだろう。また海外での隆盛が、日本の家元宗家にとつて、これまでの伝統とのいかなる連続や非連続を齎すことになるのかの検証は、柔道や剣道さらに弓術・道、さらには華道、書道などとも比較しながら、今後将来にわたって、異文化交渉史研究の一環としてなすべき作業となるだろう。だがこの将来の課題は、本稿に期待されている範囲をすでに大きく踏み越えている。

筆者はこの四半世紀、パリ、ローザンヌ、ミュンヘン、ヴィーンそしてスペインのサラマンカと、限られた数の海外道場を訪れた経験を持つに過ぎない。だが、そこでの現地の愛好者との交歓からは、実に貴重な人生の糧を得た。戦前、ひとつ間違えば狂信的で独善的な国粹の道具に利用されても不思議でなかったひとつの武藝が、かえって戦後になって東西文化の橋架けとしての使命を果たすに至った。この連続と不連続の妙味に改めて畏怖を覚えつつ、こうした報告に執筆の機会を与えてくださった、チューリッヒ大学教授、クロッペンシュタ

イン先生への感謝の念とともに、本稿を閉じることにした。

次の機会には、是非ともチューリッヒで合気道道場の扉を叩いてみたいものである。

二〇〇二年三月十日

文献一覧

植芝吉祥丸『合気道開祖 植芝盛平伝』（講談社、一九七七）

植芝吉祥丸『合気道真諦』（講談社、一八八六）

植芝吉祥丸『合気一路：戦後合気道発展の風と雲』（出版芸術社、一九九五）

植芝吉祥丸『合気道開祖 植芝盛平伝』（改訂版）（出版芸術社、一九九

九）

植芝守央『植芝吉祥丸道主の肖像』（出版芸術社、二〇〇〇）

小田部胤久『芸術の逆説』（東京大学出版会、二〇〇一）

鎌田茂雄『禅と合気道』（人文書院、一九八四）

北澤憲昭『眼の神殿』（美術出版社、一九八九）

木村竹雄『透明な力 不世出の武術家 佐川幸義』（講談社、一九九五）

塩田剛三『合気道入門』（永岡書店、一九七五）

塩田剛三『合気道人生』（竹内書店新社、一九八五）

塩田剛三『合気道修行：対すれば和す』（竹内書店新社、一九九二）

塩田剛三『追悼誌編集委員会『追悼 塩田剛三』（一九九五）

塩田泰久『呼吸力で人生に勝つ：塩田剛三の健康と成功の極意』（講談

社、一九九六）

砂泊兼基『武の真人 合気道開祖植芝盛平伝』（たま書房、一九八二）

砂泊誠秀『合気道の心 呼吸力』（学燈社、一九八二）

砂泊誠秀『合気道の心を求めて：合気道開祖植芝盛平翁遺訓』（学燈社、一九八三）

鶴山晃瑞『図解コーチ 合気道』（成美堂、一九七二）

藤平光一『合気道入門』（東都書房、一九六七）

藤平光一『心身統一合気道』（日貿出版社、一九七二）

富木謙治『合気道入門』（ベースボールマガジン社、一九七三）

ノケ、アンドレ『写真とともに語る盛平合気道』（合気ニュース、一

九九六）

ブラニン、スタンレー（編）『植芝盛平と合気道』（合気ニュース、一

九九〇／二〇〇〇）

ブラニン、スタンレー『続 植芝盛平と合気道』（合気ニュース、一九

九二）

ブラニン、スタンレー『改訂版 武田惣角と大東流合気柔術』（合気ニ

ュース、二〇〇二）

ペルティン、ハンス『美術史の終焉』（元木幸一訳、勁草書房、一

九九二）

望月稔『技法 日本傳柔術』（講談社、一九七八）

松田隆智『秘伝日本柔術』（新人物往来社、一九七八）

吉丸貞雄『換骨奪拳入門』（非売品、一九七八）

吉丸慶雪『合気道の科学』（ベースボールマガジン社、一九九〇）

*

『柔術・合気術』（日本武道大系 第六巻、同朋社、一九八二）

『空手道・合気道・少林寺拳法・太極拳』（日本武道大系 第八巻、同朋社、一九八二）

『大東流合気武道』（大東流合気武道東京総支部、一九八九）

『武田惣角と大東流』（大東流合気術総覧 一、BABジャパン、一九九六）

『合気柔術の神髄』（大東流合気術総覧、BABジャパン、一九九六）

* 本稿はエドワード・クロツペンシュタイン（編）『近代日本文化の連続性と非連続性 一九二〇～一九七〇』勉強出版社 二〇〇五年刊行予定の拙稿である。読者諸賢のご批判を得て、訂正・改稿の機会が得られたならば幸いである。（二〇〇五年四月十八日追記）

平成十七年度 第四十六号

赤門合氣道

編集 東京大学運動会合氣道部
発行 赤門合氣道倶楽部
印刷 株式会社 東大教材出版